

偽義経

冥界に歌う

令和編

目次

偽義経 冥界に歌う 令和編 7

あとがき 182

上演記録 186

●登場人物

《奥州奥華》

源 九郎義経みなもとのくろしつね
奥華秀衡おうがのひでひら
奥華次郎泰衡おうがのじろうすひろ
黄泉津の方よもつ
奥華次郎泰衡おうがのじろうすひろ
木乃伊守の干殻火ミイラもり ひからび

奥華秀衡

黄泉津の方

奥華次郎泰衡

木乃伊守の干殻火

くくり

奥華十三おうがのじゅうさん

佐郷元治さこうもとほる

《義経一党》

静歌しずか

武蔵坊弁慶むさしぼうべんけい

常陸坊海尊ひたちぼうかいそん

《鎌倉源氏》

源 頼朝みなもとのよりとも

遮那王牛若しやなおうしわか

北条政子ほじょうまさこ

土肥実平どいさねひら

梶原景時かじわらかげとき

おかめの方

《朝廷仏閣連合》

炎上院えんじょういん

鈍覚大僧一正どんかくだいそうじょう

通風権僧正つうふうこんのそうじょう

《冥界の人々》

奥華清衡おうがのきよひら

奥華基衡おうがのもとひら

奥華の兵士達

奥華の女達

源氏の兵士達

源氏の女達

平氏の兵士達

平氏の女達

山法師達

奥華の先祖達

— 第一幕 —

偽義経

西海さいかいに逸はやる

【第一景】

日の本の国。

長かった貴族による支配から脱して、武士が力を持ち始めた頃。

当時、京の都は公家と平氏が実権を握っていた。だが、東国では、平氏討伐を狙う源氏の棟梁頼朝が、鎌倉を拠点に着々と力を蓄えていた。

日の本が源氏と平氏、二つの勢力に二分されようとしていた中、国の北方、ミチのくと呼ばれる奥州だけは、いずれの勢力にも属さず独立自治を貫いていた。

奥州をまとめるは奥華おうが一族。その都、奥泉おくいずみは黄金の都とも噂されていた。

× × × × × ×

奥州、奥泉。そのはずれ。

社がある。その奥には洞窟。奥華の民は死者を木乃伊ミイラにするという風習があつた。この洞窟はその先祖代々の木乃伊が眠る、漆黒の窟いわやである。

と、そこに若侍が若い女性を無理矢理引つ張つてくる。若侍の名は遮那王牛若しゃなわうしわか。女は嫌がつている。

それを止めている僧形の男と若い武士。僧は常陸坊海尊ひたちばなうみそん。武士は奥華次郎泰衡おうがのじろうやすひらだ。

牛若 騒ぐな、騒ぐなと言うに。

女 困ります。困ります、若様。

牛若 何が困る。この俺が選んでやったのだ。有難く思え。

海尊 やめましようよ、牛若様。

牛若 ぐずぐず言うな、海尊。こんな田舎で他に何の楽しみがある。

次郎 泰衡も必死で止める。

次郎 ほんと、やめて下さい。ここはまずいです。

海尊 そう。ここは地元の者達が聖なる場所と崇めている所。そんな所で、いかがわしい事してたらバチが当たりますよ。

その言葉にちょっと怯むが強がる牛若。

牛若 だから面白いんじゃないか。さあ、来い！

女を連れて強引に洞窟に入ろうとする。

次郎 牛若様、おやめ下さい！（と、彼の肩を掴む）

牛若 触んじゃねえ！

乱暴に次郎を振り払う牛若。次郎、地面に転がる。

牛若 俺を誰だと思ってる。源氏の棟梁源頼朝みなもとのよりしもの弟、遮那王牛若だぞ。奥華の田舎者風
情が気安く触るんじゃねえ！

と、次郎を蹴りまくる。次郎、女に声をかける。

次郎 逃げろ、今のうちに。
女 はい。

駆け去る女。

牛若 待て。

と、追おうとするが、次郎が足にすがりつく。

牛若 次郎、てめえ、しつこいんだよ！

と、再び次郎を蹴る牛若。

海尊　もういい。おやめなさい。やめなさいってば、若！

海尊の諫めに、ようやく蹴るのをやめる牛若。海尊、次郎を起こす。

海尊　大丈夫ですか、次郎殿。

次郎　ええ、私は。

牛若　海尊、てめえの主人は誰だ。

海尊　え。

牛若　誰だって聞いてんだよ！（と、海尊の頭をはたく）この俺だろう、牛若様だろう。なのに、なんでこいつをかばう。

海尊　いや、そういうつもりは。

牛若　口答えすんのか。

海尊　でもね牛若様、我々は平氏に追われて、このみちのくに逃げ込んで、次郎殿達奥華の家に厄介になって、しかも出兵のお願いもしようとしてるのです。お立場をお考え下さい。

牛若　お前もそう思ってるのか、次郎。お前らが俺を養ってる。そう思ってるのか。

次郎 いえ、私は。武家の棟梁、源氏のお血筋のお世話ができるだけ光栄だと。
牛若 け。その言い方が生意気なんだよ。

「再び突っかかるうとする牛若に、思案していた海尊がぼそりと呟く。

海尊 でもね、若。ここ、出ますよ。

牛若 え。

海尊 これ。(と、両手を前に下げて幽霊の仕草)

牛若 え。

海尊 ここは「漆黒の窟」。あの洞窟の奥には、奥華の先祖代々が木乃伊ミイラとなつて眠つてい
るとか。この窟を冒瀆する不届き者には、木乃伊が蘇つて崇りをなすと。
牛若 ……。

海尊の言葉に同調する次郎。

次郎 そ、そうです。出ますよ、木乃伊の怪物が。

海尊 さ、おとなしく帰りましょ。

牛若 ば、ばかやろう。なにが木乃伊の怪物だ。そんなもんにこの俺がビビると思つてんのか。武家の棟梁、源氏の血を引く遮那王牛若様だぞ。

と、ムキになると洞窟の入り口で叫ぶ。

牛若
いるなら出てこい、木乃伊野郎!!

と、洞窟から、干からびた木乃伊のような男が駆け出してくる。

木乃伊男
静かにしろー!!

牛若
うわああ!! (驚いて飛びずさる)

木乃伊男
この窟は、奥華のご先祖の霊が眠る場所。大声出す奴はわしが許さねえ!!

と、牛若に襲いかかる木乃伊のような男。

牛若
うわ、うわああ!!

と、狼狽した牛若、刀を抜いて木乃伊男を斬る。

木乃伊男
ぐはあ!

次郎
干殻火さん!

ぐはあ!
干殻火さん!

海尊

え？

次郎

その人は、この漆黒の窟を守る、木乃伊守ミイラもりの干殻火さんです。

干殻火と呼ばれた木乃伊のような男、よろよろと起き上がる。

干殻火

牛若

その通り！ この干殻火さんの目の黒いうちは誰もこの窟には入れさせねえ。人間じゃねえかああ！！

と、一瞬ビビった自分に腹を立て、干殻火に八つ当たり。彼を切り刻む牛若。

干殻火

……わしは……、わしは……、木乃伊守の、干殻火さん。わが人生に一点の湿り気なーし！！

と、天に向かって叫ぶと絶命。倒れる干殻火。

次郎

干殻火さーん！！

牛若

ばかやろう、ビビらせんじゃねえ。

と、干殻火の遺骸を足蹴にする。

次郎

いい加減にしろ！

と、干殻火をかばい抱き起こす次郎。

牛若

なにい。

海尊

若。(と、諫める)

牛若、気持ちが治まらない。辺りを見る。

と、落ちていた枯れ枝を拾う。

牛若

海尊、火をつけろ。(枯れ枝を差し出す)

海尊

え。

牛若

いいからこいつに火をつけろ。

次郎

な、何を。

牛若

この奥に木乃伊の化け物があるんだろう。俺が退治してやる。

海尊

そ、それは。

牛若

いいから、早く。

次郎、干穀火の亡骸を横たえると立ち上がり、牛若の前に立ちはだかる。

牛若
なんだ。

次郎
ここから先には行かせない。

牛若
ほう。

次郎
漆黒の窟は我ら奥華一族代々の魂が眠る場所。それに火をかけるなど、断じて許され
ない。

牛若
ほほう、断じてときたか。いいねえ、断じようじゃないか。(と、刀を抜く)

次郎
!

牛若
さあ、抜けよ次郎。俺を止めたかったら腕づくで来な。

海尊
若。

牛若
黙って見てろ。(次郎に)お前が奥華の意地を通すなら俺だって源氏の棟梁の血筋。

武士と武士の面子の問題だ。だったら刀で筋を通す、それが武士つてもんだらう。ど
うした、次郎。奥華の男は腰抜けか。

次郎
く!(と、抜刀する)

牛若
抜いたなあ。

と、嬉しそうに打ちかかる牛若。次郎、牛若の剣の速さについていけない。受けるのに
必死。

牛若 ほら、どうした。隙だらけだぞ。ほら、右足。ほら、左腕。

致命傷にならないよう傷を負わせていく牛若。いったん離れる。

牛若 話にならねえな。どけ。どかないと今度は首が飛ぶぞ。

次郎 どくものか！ 断じてどくものか！

牛若 馬鹿が！

と、次郎に襲いかかろうとした時、牛若の背後から駆け込んできた男が牛若の背中にドロップキックを放つ。おうがのげんくろうくにひら奥華玄久郎国衡だ。

玄久郎 うおりゃああ！

牛若 うあ！

すっころがる牛若。

玄久郎 だいじょうぶか、次郎。

次郎 兄上。

玄久郎

俺の弟に何してくれてる、牛若！

海尊

ありがとう、よく止めてくれた、玄久郎殿。

次郎

なんで、ここに。

玄久郎

狩りの帰りだ。でっけえ猪が捕れたぞ。

と、物陰から大きな猪の死骸を引つ張り出す玄久郎。

玄久郎

しつかりしてくれよ、海尊。牛若のお守り役だろう。

海尊

いやいや、言ってお方じゃないから。少しくらい手荒なほうが薬になる。さすが

は奥華の嫡男、玄久郎国衡殿だ。

玄久郎

……ちやくなん？

次郎

兄上ということです。

玄久郎

おう。(倒れている牛若に)ほら、これで懲りただろう。起きろ、牛若。

と、うつぶせで倒れている牛若の様子を見ていた次郎の表情が強張る。

次郎

……兄上。

玄久郎

ん？

次郎

死んでる。

【第七景】

奥華の国。

現れる次郎。元治が反対側から現れる。

元治 泰衡様。源氏の軍が国境を越えました。

次郎 聞いている。国境守備の強者達が……。

元治 源氏の兵達、侮れませぬ。一国の長として、覚悟をお決め下さい。

次郎 元治は戦の仕度を。くれぐれも怠るな。

と言つと歩き出す次郎。

元治 どちらへ。

次郎 漆黒の窟だ。

元治 窟？

次郎 戦の前に兄上の顔がみたい。それだけだ。

窟へ行く次郎。元治、その背中を見送ると逆方向に駆け去る。

× × × ×

漆黒の窟。

木乃伊達が並んでいる。中央に棺がある。

義経の遺体が、木乃伊化されて収められている。

その前に立つ静歌。六絃を持って義経の棺を見つめている。そこに入ってくる次郎。

次郎

まだいたのか。

静歌

……。

次郎

(静歌の視線に気づき) 兄上の棺だ。中には兄上の木乃伊が眠っている。

静歌

……なんだったんだろうな、この男は。

次郎

……まったくな。……兄上のことが好きだったのか。

静歌

……そんなんじゃない。……でも、そうだったのかな。

次郎

え。

静歌

私の歌をあんな風に喜んでくれた人は初めてだった。

次郎

あんな風に？

静歌

まっずい山葡萄食べた感じだった。おかしいよね。

その表現に玄久郎らしさを感じ切なくなるが、あえて表情には出さない次郎。

次郎 源氏の兵が国境を越えた。この奥泉の都もまもなく戦になるぞ。早く去れ。

と、静歌、六絃の調弦を始める。

次郎 おい。

静歌 一曲歌ったら。歌ったら消えるから。

次郎 兄上のために？

静歌 九郎と、これから死んでいく奥華の人々のために。

次郎 ……それ、絃、張り直したのか。

静歌 九郎の弓弦をもらった。彼の亡骸から。

次郎 ……。

静歌が歌い始める。

次郎ももう止めない。聞き入っている。

と、異変が起こる。

地鳴りが起き、漆黒の窟がゆれる。

奇妙な光が辺りを包み、白い霧が立ちこめる。その光と霧から、義経が転がり出る。

義経
うわあああ！

次郎と静歌、驚く。義経も驚く。

次郎
兄上！

静歌
九郎！

義経
お前ら！　ここは!?

次郎
で、出たな、怨霊！（と、刀を抜く）

義経
え。

次郎
お前を斬ったのは弁慶だ。我らを恨むのはお門違い。去れ！

と打ちかかる次郎。

義経
おい、待て。

と、その剣を握むと奪い取る。素手で剣を握まれたことに驚く次郎。当の義経も驚く。

義経
え？

次郎
……剣が効かない。怨霊め……。

義経 待て、次郎。俺だ。玄久郎だ。

静歌 (次郎に) 落ち着いて。確かに霊じゃない。この人、生きてる。いや、生きてないけど生きてる。

次郎 なに? どういうことだ。(と義経に聞く)

義経 いや、俺に聞かれても。さつきまで冥界にいたんだ。親父様達と。

次郎 父上と。

義経 それだけじゃねえ。じいさんにひいじいさん。(ハツとして静歌を見る) お前か。お前の歌か。

静歌 ……多分。

義経、静歌の手を取る。

義経 すげえなあ。お前の歌で冥界から戻って来られた。やっぱ、お前、本物だ。

静歌 ……多分この絃のおかげだ。この絃、九郎の弓弦だよ。

義経 え?

次郎 ……奥華の弓弦は自分の髪の毛も織り込む。己の魂で狙う相手の魂を昇天させるために。

静歌 じゃ、これも。

次郎 そう。その弓弦には兄上の髪と魂が織り込まれている。それが影響してるんじゃない……。

静歌 なるほど。そういうことか。

義経 なるほど。そういうことかあ。(とうなずく目玉はガラス玉)

静歌 目がガラス玉だよ。

次郎 わかってないでしょ。

義経 わかってますよ。そんなことより、戦はどうなった。

次郎 え。

義経 源氏の兵はどうしてる。攻めて来てるのか。

次郎 国境が破られた。

義経 やべえじゃねえか。黄泉津の方に会わせろ。

次郎 なぜ。

義経 俺が兵の指揮をする。源氏のことなら俺が一番よく知ってる。

次郎 しかし……。

義経 館にいるんだろう。

勝手に走り出す義経。

次郎 おい、待て。

あとを追う次郎。静歌も続く。

中島かずき（なかしま・かずき）

1959年、福岡県生まれ。舞台の脚本を中心に活動。85年4月『炎のハイバーステップ』より座付作家として「劇団☆新感線」に参加。以来、『髑髏城の七人』『阿修羅城の瞳』『朧の森に棲む鬼』など、“いのうえ歌舞伎”と呼ばれる物語性を重視した脚本を多く生み出す。『アテルイ』で2002年朝日舞台芸術賞・秋元松代賞と第47回岸田國士戯曲賞を受賞。

この作品を上演する場合は、中島かずきの許諾が必要です。

必ず、上演を決定する前に申請して下さい。

(株) ヴィレッジのホームページより【上演許可申請書】をダウンロードの上必要事項に記入して下さいまで郵送してください。
無断の変更などが行われた場合は上演をお断りすることがあります。

送り先：〒160-0022 東京都新宿区新宿3-8-8 新宿 OT ビル 7F
株式会社ヴィレッジ 【上演許可係】宛

<http://www.village-inc.jp/contact01.html#kiyaku>

K. Nakashima Selection Vol. 32

偽義経 冥界に歌う 令和編

2020年2月5日 初版第1刷印刷

2020年2月15日 初版第1刷発行

著者 中島かずき

発行者 森下紀夫

発行所 論創社

東京都千代田区神田神保町2-23 北井ビル

電話 03(3264)5254 振替口座 00160-1-155266

印刷・製本 中央精版印刷

ISBN978-4-8460-1901-3 ©2020 Kazuki Nakashima, printed in Japan

落丁・乱丁本はお取り替えいたします